

法律図書館はいかにあるべきか

ハーヴァード大学法律図書館長アール・C・ボーガソン氏
とアメリカ法曹財団ジョン・C・レアリー氏をかこんで

一 訪日の目的

大野

これからお二人をかこんで、お話を承りたいと思います。あとでご質問なり、ご意見なり、腹藏なくおっしゃっていただきたいと思います。通訳は、法学部の土井助教授にお願いいたします。まず、こんど日本においてになった目的、ミッションについてお話し願いたいと思います。

レアリー

大野博士、みなさん、ボー

ーガソンさんと私は、きょうの午後みなさんとお会いできる機会をもって、大変嬉しく思います。みなさんのなかには、すでにお会いした方もあります。みなさんが私たちの声をきくの、に、たいくつなさらないければと思います。まず、私たちの日本訪問の目的について、簡単に話しましょう。

私たちは二人ともロー・ライブラリアンで、ただいま行なっている旅行は、ハーヴァード・ロー・スクールとアメリカ

法曹財団(American Bar Foundation)

の協力と、みなさんご存知のアジア財団の援助によるものであります。ハーヴァード・ロー・スクールのライブラリアンとアメリカ法曹財団のライブラリアンがいっしょに旅行するのは、自然のなりゆきです。すなわち、ハーヴァードはアメリカ合衆国で一番大きい法科大学であり、私たちが関係しているアメリカ法曹協会(American Bar Association)は、全国的な法曹団体だからです。

私たちは、法曹、法律図書館や法律の

- 1 訪日の目的
- 2 法学教育と図書館
- 3 図書館間の相互協力
- 4 法律文献センターの必要性
- 5 アメリカの司法試験
- 6 外国法文献と国内法文献



座談会において歓談する出席の各氏——早稲田大学校友会館にて

ライブラリアンに関心をも
っております。法律家につ
いては、私たちは、日本の
法律実務家、第一審裁判官
や控訴審裁判官、ならびに
法学部の教授がどのように
専門職業を行なっている
か。すなわち、どのような
研究施設があるか、職務上
必要とするとき、どのよう
な文献・資料が得られる
か、をみたいのであります。
この視察を行なうにあ
たっては、もちろん、日本
の法律専門家にお会いした
いと思っています。また、
個人的に実務家に関係のあ
る法律図書館員や大学の法
律ライブラリアンの方々に
もお会いしたい。私たち
は、日本とアメリカ合衆国
およびその他の諸国との
間、ならびに、アメリカ合

出席者 (五十音順)

早稲田大学図書館長

大野 實 雄

明治大学図書館司書長

奥村 藤 嗣

東京大学附属図書館長

岸 本 英 夫

日本大学図書館長

斎 藤 敏

早稲田大学法学部助教授

土井 輝 生

ハーヴァード大学法律図書館長

Earl C. Borgeson

アメリカ法曹財団理事

John C. Leary

司 会

大野 實 雄

昭和三八・七・一三

於 早稲田大学校友会館

衆国とその他の諸国との間の、国際交流の促進を目的とする非公式の訪日使節ということができます。私たちは、法曹・裁判所および法科大学が、増大する貿易に対処する専門職業人を育成し、また専門ライブラリ

アンを養成するため、何をしているかを知ることに関心をもっておりません。

このような理由で、きょうの午後お会いしたみなさんは、私たちが、フランス、スペイン、南アメリカ、

ロシア、あるいは

アメリカ合衆国といった諸外国の法律文献の蒐集について、いくつかの質問をしたことがおわかりと思います。私たちは、みなさんがこれについてどのような関心をもたれ、準備をされているかを知

り、また、この関心を裏付ける図書館の資料をみたいのであります。

ボーガソンさんは、アメリカ合衆国でもっとも大きい法律図書館のライブラリアンでありますので、とくに、東京にお



早稲田大学図書館を訪問の両氏—図書館正面玄関にて (38.7.13)。左より—レアリ氏、ボーガソン氏。大野図書館長、土井法学部助教授

られるみなさんのいく人かが関係しておられるような図書館行政について、とくに関心をもっておられます。ボーガソンさんは、ハーヴァード法律図書館の行政ならびに運営について、また、これと大

学全体との関係について説明され、さらに、早稲田大学の図書館行政についても多くの情報をえられました。これはボーガソンさんの特別のミッションでありま。また、ボーガソンさんは、法律図書館および一般図書館における法律図書の文献目録資料も得たいと思っておられます。ボーガソンさんは、街頭で美しい日本の婦人をご覧になりますが、これは公式のミッションではありません。(笑声)

私自身のミッションは、アメリカ法曹財団が独立の建物をもち、専属の職員をもつ全国的な研究財団でありますので、とくに、日本における類似の団体と共同研究計画をもつことができるかどうかの可能性について調査することにあります。私たちは、夏の期間だけしか所属機関からはなれることができないので、残念ながら日本に滞在することはかざられています。私たちは、東京大学の図書館を訪問したのち、本日午後早稲田大学図書館を訪問したのです。これから中央大学に行きます。ボーガソンさんは京都大

学も訪問しました。私たちは、水曜日（7月10日）に、私立大学図書館研究会の席上で、多くのライブラリアンに会いました。また、東京大学のスタッフにも会いました。さらに今朝は、大野博士の依頼で、早稲田

大学図書館の司書研修会の席で、早大のライブラリアンにもお話をしました。私たちがどんな連絡をとったかわかりいたいため、そのほかの訪問先もあげてみたいと思います。国会図書館は二度訪問し、きの

うの午後は、各部門の長の方々にお会いしました。また、最高裁判所の図書館も訪問しました。司法研修所にも行きました。ボーガソンさんは忙しかったので、私は単独で東京弁護士会の図書館を訪れ

法律図書館はいかにあるべきか



大野館長より阿氏へ早稲田大学図書館のペナントを贈呈—早稲田大学司書研修会における講演に際して（38.7.13）。

ました。また、日本で開業しているアメリカ人弁護士の事務所や、東京にある三つの日本人弁護士事務所も訪問しました。

以上、私たちの訪日の目的を述べ、い

んとして関係者とお話することができました。私たちは、ライブラリアンとして、また法律家として、世界中どこでも、たがいに理解しあうことができません。つまり、相互の理解を深めることが、私たちがみなさんとお会いした第一の目的です。きょうの午後は、みなさんとこのような集まりができて、大変うれしく思っております。

ボーガソン 私は、これまで訪問した図書館やお会いした方々についての感想を述べたいと思います。これは結論ではありませんし、また、よく整理されたものでもありません。ただ、以後の討論の口火をきるためにお話するわけです。もちろん、レアリさんがいわれたように、私たちの能力や時間はかぎられていることを考えにいなければなりません。

アメリカと日本の図書館、とくに法律図書館の間には、多くの相違があります。これは批判ではなく、単なる表面的な比較であります。一般に、日本におけ

る法律圖書のコレクションは、組織と管理の面において、非常に複雑であります。しかし、この複雑性は、大学内における図書館と法学部、大学院、特別の研究所との関係をみますと、理解することができます。また、大学の外でも、裁判所や弁護士会の図書館は、日本における法曹の組織を反映して、複雑であります。私の図書館のような、特別図書館は、統一性と統合性に富んでおります。この統一性の焦点は、法律実務にあるのです。法律教育は、すべて大学院のレベルで行ないます。法律実務家は、直接、会社や政府にもはいます。そのため、法律家のいるところはどこでも、おなじ形式の図書館があるのです。つまり、アメリカ中、どこに行っても、おなじように図書資料をあつめた図書館がみられるのであります。しかし、複雑な日本の法律図書館の間でも、大きい点において、なにか類似性があると思われます。これは目的が同一であるということです。日本のライブラリアンとお話したあと、

目をとじますと、アメリカのライブラリアンもおなじような問題を提起するのをおいおこします。たとえば、セントラリゼーションとディセントラリゼーションの問題、独立したロー・ライブラリーの設置の問題、法律圖書の分類の問題、圖書の選択・購入および交換の問題、予算の問題、建物の問題、あるいは文献のレファレンス・サービスの問題です。これらは、日本の図書館とアメリカの図書館に共通の問題です。これらの問題に対する解答は異なるかも知れません。研究組織が複雑であるか、単純であるかによって異なるでしょう。したがって、私は、個人的に見解や経験について話しあつて、個別的に問題を解決する方が、総合的に問題を解決するよりやさしいと思います。

概念的なことを話すのはこれまでにして、質疑応答にはいった方がよいでしょう。

二 法学教育と図書館

大野

私が一つおうかがいしたいと思いますが。大学として、法学教育のあり方と図書館との関係なんですが、五〇〇人も六〇〇人も学生をあつめて特定の教科書を読ませ、あとは、希望する者に図書館にはいつて読めというのが、現在の日本の法学教育には多いと思うのです。

アメリカの場合、どうやって学生を図書館にひきよせるか、たとえばケース・メソッドのやり方とか、どうすれば研究する教授や研究員がもっとひんばんに図書館に足をむけてくれるか、これは大きい問題だと思いますが、こういう点について教えていただければありがたいと思います。

ボーガソン

私の経験にもとづく解答は、私が仕事をしているロー・スクールの形態からでくるわけです。ハーヴァードのロー・スクールの学生はざっと

ますか。

ボーガソン

まず、さきのことについて

一五〇〇人、一番大きい教室には二〇〇人から二五〇〇人の学生がおります。中央閲覧室には、一〇月から二月まで、多いときには八〇〇〇人の学生がきます。この期間に、エイムズ・コンペティション（模擬裁判）が行なわれます。図書館が学生の利用を促進するには、コンフォタブルに、アトラクティヴに、しかも、かんとんに図書をみることができるようにし、ながい時間開放することです。知的刺激は、教授の方からなされるべきです。各先生は、問題をあたえ、参考文献を示すときに、学生に図書館に行つて、知識を深め、資料をもとめるようにしむけることです。

大野 たとえば、レポートなんかをださせて。

ボーガソン

先生は自分で答案を読まなければなりません。答案用紙は、うすいノードのかたちになっていて、多いときには五〇〇冊くらい読まなければなりません。

大野

教授は一週何時間くらい教え

法律図書館はいかにあるべきか

なにか。

斎藤

私は日本大学の斎藤です。私

は、日本の大学制度について理解していただかなければならないと思います。終戦後、アメリカの指導で、大体アメリカに似た制度になりましたが、法学教育はちがいます。日本では四年間、アンダー・グラジュエートのコースのなかで、法学を勉強させます。その四年間のうち大体二年は、リベラル・アーツ教育についてやします。専門教育は二カ年だけです。さいごの一年は、就職の試験で、学生はその方にほん走っています。いったい、法学にかんする勉強ができるかできない

か、これが大きな問題です。

もう一つは、法学部の学生のうち、ほんとうに法律を勉強しようとするのは、司法試験をうけようとする学生で、しかも、この試験の合格率は、大体二〇分の一ないし三〇分の一です。おびたしい数の学生をかかえた日本の大学が、あとの学生はどうするかというと、会社とか官庁に行くものだから、そこで図書館もこのことを考えざるをえなくなりま

す。

私は、日本の大学をみた場合に、大学院が、専門課程を勉強することについて、かろうじてむこうのロー・スクールに相当するのではないかと思います。日本の大学をみていただいた場合に、ここをわかつていただかなければならないと思います。もう一つは、法律の性質が非常にかわってきたことです。戦後、アングロ・アメリカン・ローが日本にはいつてきました。以前は、アングロ・アメリカン・ローというものは、日本では、全然想像しなかったのです。したがって、コン

ティネンタル・ローが、日本のあらゆる法律の中心となっていた。たとえば、トーツとかエクイティとか、ジュリイ・システム、陪審制度は、日本にはない。ところが、刑事訴訟法は、すでにほとんど完備するくらいに、アメリカのおかげで完成しました。しかし、刑法はそのままで、さいきん改正が問題になったのであります。この改正に参加する方々は、大陸法に通じた方々です。すなわち、アングロ・アメリカン・ローの教育をうけていない。その関係で、ロー・ライブラリーの性質は、まだわれわれのヴィジョンにもはいっていない。今日は、さいわいに東大の岸本先生がみえています。岸本先生は、館長になられてから大体三年になります。御病氣にもかかわらず、もともとコンサバティブな東京大学の図書行政改善運動の核心となっておられる。それから、私の知る範囲では、東大と京都大学にはかなりの法律書がある。ロー・ライブラリーとしては、バー・アソシエーションのもっているバー・ファウンデ

ーションやハーヴァード・ロー・スクール・ライブラリーは、実にうらやましく思っています。とてもこのようなことは、われわれのヴィジョンにもはいっていない。これが、われわれの現状ではないかと思っています。それから図書館一般をながめまして、戦後、あたらしい図書館の制度になって、まだ十二、三年にしかなっていないんです。けれども、戦争のおかげで、日本では図書館の制度が非常にすすんできました。

ボーガソン 私たちは、これを図書館の相違、組織および運営のやり方にむすびつけて観察しました。

これについては、つぎの点を明らかにしたいと思います。私は、ただいま、アメリカの制度をそのまま日本にとり入れることをすすめたくはありません。これは危険だと思っています。私たちは、だれが日本でアメリカ法を教えているかを知ろうとしているではありません。アメリカでは、日本法について教えている者はありません。しかし、日本について教え

ようとする傾向があります。すなわち、地域研究が行なわれていますので、どこかのロー・スクールで、日本法を教えるようになるかも知れません。

私たちがお聞きしたいのは、法律家がアメリカ法に関係する問題に直面したとき、どのようにこれを処理するかということであります。私たちは、この問題を解決するため、日本のロー・スクールになにか助言なり援助なりをあたえることができればよいと思います。

日本におけるアメリカ法の教育の実際については、ごく大ざっぱな理解をもっておりま

す。齋藤 私の場合には、インター・ライブラリー・サーヴィスがあるのです。そこへもちこみます。

三 図書館間の相互協力

ボーガソン インター・ライブラリー・サーヴィスは、カリフォルニア大学

やミシガン大学にもあります。私は、インター・ライブラリーの協力の標準的なかたちについてお話ししましょう。

斎藤 私たちは、あなたのライブラリー・システムについてもっとお聞きしたいのです。

ボーガソン 小さい公共図書館であるところと研究図書館であるとを問わず、ほとんどすべてのアメリカの図書館には、この形式を標準的な連絡方法として採用しております。たとえば、私の図書館に――〇〇回の援助希望がくるとします。これに対して、私の方では一回の割合でどこかの図書館に援助の申込みをします。これには、図書の貸出ばかりでなく、書物の一部分の複写や、ほう大な資料のマイクロフィルムの複製などがあります。インター・ライブラリーの連絡、相互援助はどこでも認められていると思います。これには財政的な負担がかかります。たとえば、つぎのような場合を考えてみます。私のところの学生は大学に授業料を払います。その対価として、学生は、教

育をうけ、図書館を利用することができません。カリフォルニアの学生は、私の方に授業料を払いません。しかし、その学生は、私の方の図書を借りだし、カリフォルニアでこれを使用することができません。私の方の学生が、カリフォルニア大学の図書館の図書を借りだすことができます。私の方には、公平にいきます。しかし、図書館が、ハーヴァードのような主要な研究図書館である場合においては、私の方から外部の図書館に要求するよりも、外部から私の方に要求がくることの方が多いです。したがって、ハーヴァードの学生は、外部の者に無料で図書館を利用させるために、授業料を払っていることになります。このようにサーヴィスがかたよってくるので、予算の問題がでてくるのです。

私はつぎのように思います。ちかい将来、数年間において、多くの小さい図書館は、この問題について善処しようと考えているようになるでしょう。大きい図書館では、このような外部からのリクエスト

を処理するために、自分で職員を雇わなければなりません。アメリカの図書館は、このような取引について、最低料金を払うようになるものと思います。私はこれが実現すると思います。これは、すべての図書館が必要だと考えていることです。が、まだ、だれも立ちあがって、まっ先きにこれを実施しようとする勇氣のある人ができておりません。

レアリー インター・ライブラリーの貸出や図書館相互間の協力の問題について、一つ付け加えたいと思います。私の感じでは、アメリカのロー・スクール・ライブラリーやロー・ライブラリー、これは約八〇〇あると思いますが、これらのなかには、大学付属のもの、裁判所付属のもの、州立のもの、法律事務所のものなどがあります。これらの図書館の間には、協力の精神が旺盛です。ほとんどのロー・ライブラリーは、書式に書きいれたり、電話をかけたたり、電報をうったり、手紙をかいいたり、資料を送ったりすることを、あまり負担に思っていない

と考えます。

この協力の精神は、図書購入の問題にもあらわれています。特に、私の住んでいるシカゴ地域ではそうです。とりわけ、アメリカ合衆国の外の外国の図書を購入する場合です。シカゴやボストン、東京のロー・スクール・ライブラリーや、ロー・ファーム・ライブラリーは、一定の基礎資料を必要とします。たとえば、法令集、判例集、定期刊行物や、註釈書を必要とします。しかし、外国の図書を購入するにあたっては、協力して購入計画をたてる必要がでています。ボーガソンさんの図書館には、建物・設備があり、資金があり、資料の蒐集については、全世界をカバーすることを目的としています。これは、非常にユニークな、めぐまれた場合です。しかし、シカゴ地域では、責任を分担するという方法がとられています。たとえば、ノースウェスタン大学のロー・ライブラリーでは、マレー半島の法律図書を蒐集する。他のライブラリーでは、そのほかの外国の法律

図書の蒐集に責任をもつ。

次の点も指摘したいと思います。たとえば、シカゴ大学のロー・スクールの学生が、シカゴ市内の、大学と反対の方面に住んでいるとします。図書館は利用者を制限しないで、その学生は住んでいる近くの図書館を利用することができます。私の図書館は法曹がサポートしているのですが、教育機関でありますので、一般公共にもドアが開かれているのです。私の図書館は、ボーガソンさんのコレクションとちがって、世界中の法律図書を集めているのでもなく、特別の研究計画のためのものでもありませんが、シカゴ周辺の一般公衆、法律家、法律学生や、外国からきた法律家が、これを利用することを歓迎します。ボーガソンさんと私は、自分たちの経験と、みなさん方の大学におけるながい伝統と歴史と、法律実務家養成の教育計画と、図書館行政とをかみあわせることはむずかしいかと思えます。たとえば、A大学の学生が、B大学の図書館に行くことは可能でない

かも知れない。私たちの理解が正しければ、タクシーにひかれた者が、タクシー運転手の過失にかんする法律図書をみるためには、ライブラリアンの特別許可が必要なのではないか。私たちは意見を交換するために訪日したのですが。

みなさん、私たちがお話ししたことについて、なにかコメントしていただければと思います。私たちが観察したことを、あやまってお伝えはしなかったと思っています。このことが、私たちが申しあげたいことの一つです。

四 法律文献センター の必要性

奥村 もう一つおうかがいしたい。戦後、英米法の影響が大きかった。それまでは、六法全書や教科書などをあたえておけばよかった。しかし、ここで問題が生じてきた。まず、判例のとりあつかいです。判例に基礎をおいた組織と満足すべきトレーニングをすることが必要だ

と思います。そこで、図書館員として、とくに御苦心なり、注意すべきことがあったら、一つ教えていただきたい。

ボーガソン 一般的観察としまして、まず、アメリカの法律研究が、すべて判例に基礎をおくものではないことに注意していただきたい。レファレンスの係は、制定法や著書・論文もみなければならぬ。すべての法科学生は、ロー・スクールにはいつて数週間すると、判例の読み方をおぼえます。アメリカ合衆国には、ライブラリー・サイエンス教育のながい伝統があり、ビブリオグラフィカル・テクニクが発達しております。戦前には、二つの大学の図書館学のコースにロー・ライブラリーの課目があったに過ぎなかった。シアトルにあるワシントン大学とコロンビア大学です。いままでは、すくなくとも八つの大学に、ロー・ライブラリーの課目がもうけられています。ノース・カロライナ大学その他の大学です。ライブラリー・スクールでは、法律文献にかんするコースがふえている

ということができます。日本では、ライブラリー・サイエンスの教育がおくられて発足したので、法律にかんするライブラリーのコースを設置するのは、時期が早すぎるかも知れませんが。

奥村 最近、法学部の学生は判例をあつかうことを教わっているわけです。戦後日本で、日本の判例集とアメリカの判例集を全部そろえることは大変なことで、完備しているところはないといつてよいと思います。そうすると判例のとりあつかいが非常にむずかしい。これをどうするかが問題です。

ボーガソン 私はいま、二つの方法を考えています。図書館学のコースに法律図書にかんする科目をもうけるのは、早すぎはしないかと申しあげました。しかし、これとは別に、ただちに解決すべき二つの問題があると思います。第一は、アメリカのライブラリーアンを日本に派遣して、アメリカのロー・ライブラリーを一つ設けて、これをモデルとして、

アメリカの法律図書のあつかい方を教えることです。これならば、八週間ですみます。第二の提案は、アメリカの法律図書をあつかう日本のライブラリーアンを、交換計画で、アメリカのロー・ライブラリーに派遣して、三ヵ月、六ヵ月、あるいは一年の期間訓練することです。

私は二つの理由で、第一の案がよいと思います。第一の理由は、言葉の問題がありますので、アメリカのライブラリーアンを日本に派遣して、通訳を通じて、多くの日本のライブラリーアンに教える方がよいと思います。第二の理由は、私自身また日本にかえってきたいからです。

(爆笑)

大野 法務図書館をごらんになったと思いますが、そこにはドイツの法律図書が大体そろっているのです。なぜかという、第一次大戦後、ドイツの図書を買い手がやさしかったからです。アメリカの法律図書については、どこか一所に完全なライブラリーをつくったらよいと思います。そうすれば、各大学の人

も実務家も、そこへ行けば判例集や雑誌などをみることが出来ます。司書を訓練しても、物がなければ活用できません。なんとかしてそのようなセンターを実現したい。これは私の希望です。

ボーガソン これは大変重要なことだと思います。問題は、そのようなセンターをどこにおくかということです。私は可能だと思う。

齋藤 これは官吏にまかしとしてはだめなのですよ。(笑声)

ボーガソン これは教育機関におかなければならない。

齋藤 活発にうごかすためには。

ボーガソン 教育者は開発者であり、大学は法律科目を教え、研究所もっている。各法律の研究機関——大学院、研究所などに単一の図書館をもたせることが必要です。一つの法律文献コレクション——日本、アメリカ、フランス、ドイツなどのコレクションを統合したものではなければならない。そして、これを完全なものにして、実務にあると、

会社にあると政府にあるとを問わず、すべての法律家に、ここに知識の源泉があることを知らしめる。ここで、すべての問題の解答を見いだすことができるようにし、職員をおいて、利用者に協力する。このようにして、弁護士、裁判官、ビジネスマンの間のギャップが埋められる。かれらは、同一の資料をあつかうものであることを自覚し、たがいに話しあうことができる。このようなセンターを、どこか一カ所、教育機関におくのがよい。これは非常にノーブルな目的です。

将来をみて、リーダーシップをとり、自由にあらゆる資料を利用することのできる立派な図書館をもつことによって、法律専門家に大きい寄与をなすことができます。

齋藤 私の考えでは、プロフェッショナルなローヤーには、英米法は必要ではないのです。ですから、純然たる学問的センターをつくった方がよい。そうでしょう、大野先生。

大野 そこで、日本におけるセンタ

ーの性格をみると……台湾人とか韓国人とかの学生が東京にたくさんきている。天狗になるのではないが、日本に完備したセンターをおけば、ほかの国におなじようなセンターをつくる必要はないのではないか。そこで、とくに日本に重点をおいて考えていただきたいとおもいます。

齋藤 後進国から学生がたくさんきています。

ボーガソン 私は、これについて次のことを申しあげたい。一カ所に世界法のライブラリーを設ける代りに、私のライブラリーはこれを目標としています。が、地域的なセンターを設ける必要があるのではないでしょうか。一つの大学をアジア法のセンターとする。一つをヨーロッパ法、一つをアメリカ法、一つをラテン・アメリカ法のセンターとする。そうして、このように組織した資料を中心として、大学のプログラムを計画することが出来る。

レアリー 私は、日本の弁護士に会

つて、タイ国と取引する依頼者のために、とくにタイ国の法律を調査するのに非常に苦労しているという話をききました。このような地獄的法律センターができれば、この問題は解決されます。

ボーガソン コレクションの範囲に

ついて、さらにお話ししたい。私たちは、すべての外国の法律関係刊行物を購入しようとして努力しています。非常に重要なのは政府の文書です。私のところの購入部は、日本にアジア法センターができれば、連絡係をおいて、すべての政府機関の資料がとどこおりに購入されているかどうかを確認することができます。

秘密文書をのぞいて、政府の部局内だけで配布されている文書がたくさんあるが、これも取得することができます。これらは部局内で使用するため刊行されてはいますが、外部の者にとっても非常に価値があります。これらは、法律文献コレクションに重要な資料です。

土井 たとえば、日本では公正取引委員会の資料があります。これは大学の

法律図書館はいかにあるべきか

図書館でもなかなかそろったものがありません。

レアリ

そのような文献が非常に重要なのです。あなた方は、政府部局の内部規則を変更して、外部の図書館にも配布させるように仕向けなければなりません。これは、戦争をしかけるようなものです。

ボーガソン

私とレアリさんもこの問題をもっておりま。私の図書館は、アメリカ法曹協会が発行する刊行物をすべて手にいれたいと思っています。これは、日本の法務省とおなじで、非常に困難です。(笑声)

五 アメリカの司法試験

斎藤

問題は別ですが、むこうの司法試験には、法曹協会がどの程度介入しますか。

レアリ

伝統的なたちでは、司法試験は州が行ないます。たとえば、私

のいるイリノイ州や、ボーガソンさんのいるマサチューセッツ州がそうです。ロー・スクールは、教育の段階において参加します。ロー・スクールは、州の最高裁判所か、最高裁判所または法曹協会の監督のもとに司法試験を行なう司法試験委員会に対して、何某は法律の課程を終了し、教授会の意見で司法試験を受験する資格を有することを証明する。司法試験

委員会には、願書や推薦状を受理して、面接を行なう。試験は、ロー・スクールの教育者ではなく、弁護士によって管理される。しかし、試験問題は、大学の法律学教授が作成することが多い。たとえば、ハーヴァード大学の教授の多くは、六州または七州の司法試験の問題を作成する。ロー・スクールと司法試験委員会は連絡を保ち、教授は、試験委員会が試験を課するような課目を教える必要がありません。したがって、二つのグループは協力します。ほとんどの州では、司法試験は、九月と三月、二回行なわれます。ハーヴァードを六月に卒業した学生は、

九月には、国内のどこの州でも司法試験をうけることができます。

司法試験は、大体三日間から四日間行なわれます。ロー・スクール自体は試験勉強をさせません。弁護士が、特別の施設をもうけて、ロー・スクールの卒業生に、試験問題にかんする準備教育を行います。これは、一人または数人の弁護士による私立の機関で、ロー・スクール自身が行なうではありません。

ボーガソン バー・レビュー・コースです。

レアリー 司法試験ののち、一カ月から三カ月たつと、試験の結果が受験者に通知されます。司法試験に合格し、州の最高裁判所で宣誓すると、弁護士開業の資格があたえられます。

六 外国法文献と国内法文献

斎藤 日本でも国内法と外国法と両方あると思うのですが、日本の学者の研

究は、外国法に非常に傾いていると思います。アメリカでは、たとえば、ハーヴァードのコレクションで、外国法と国内法の資料の割合が、どのくらい外国法に傾いているかをおききたいと思います。

岸本 日本では、国内法のコレクションよりも、外国法のコレクションに傾いている。あなたのロー・スクールでは、その割合はどうですか。日本では外国法に傾いているが、その理由は、私にはわからない。(笑声)

ボーガソン それは理解できます。私たちのコレクションの六五パーセントは、外国法の資料です。約一〇パーセントは国際法、約二五パーセントは英米法の資料です。しかし、ハーヴァードは例外で、大多数のロー・スクールでは、アメリカ法だけで、外国法の図書は蒐集しません。

レアリー アメリカ法曹財団では、世界各国のバー・アソシエーションの刊行物をあつめています。それ以外は国

内法だけです。

岸本 私の判断では、日本で法律家が図書館にあまりこない理由は、国内法の資料ではなく、外国法の資料ばかりあつめるからだだと思います。(笑声)

ボーガソン 実際には、外国法にかんする法律実務は相当行なわれていると思いますが、これは頭のなかや通信でやって、図書館にはこない。つまり、図書館にどのような資料があるか、どうしてこれを探索するかを知らないからだと思います。だから、図書館に、弁護士に対して資料を提供する準備があることを知らせる人がなければなりません。弁護士は図書館を利用しないというつもりはないのですが、外国に問いあわせたり、日本にいる少数のアメリカ人弁護士に聞いたりする方が簡単だからです。

レアリー 法学教授にも聞くことができます。(笑声)

ボーガソン 私個人の印象では、外国法の資料を蒐集する人と、これを利用する人の間隔がひらきすぎている。利用

する人は、どこに行けばよいか、どこに問題があるかがわからない。図書館では積極的に資料を提供しようとしなない。あなたの方の図書館では外国法の資料を蒐集していますが、これをまとめようとする者がいない。

岸本 それはまちがいではないと思います。アメリカの大学の図書館でも、弁護士は外国法の資料だけでくるでしょう。国内法についてもくるのではないのでしょうか。そこをおききたい。

ボーガソン もう一つの感想を述べたい。これは極端かと思っています。アメリカ合衆国のロー・ライブラリー、八〇〇ないし九〇〇のうち、二五パーセントくらいがなんらかの外国法資料を蒐集しているのではないかと思っています。この割合でいくと、ハーヴァードの次に大きいロー・ライブラリーでは、割合は五八パーセントと四二パーセントくらいではないでしょうか。アメリカの図書館の態度がちがっている点は、私たちは需要を考慮してコレクションを行なっているという

法律図書館はいかにあるべきか

ことです。たとえば、ロー・スクールのライブラリアンは教授会に出席します。たとえば、スミス教授は私に、来年度は日本法を教えるといっています。教授は、それが適当な人をえらんで計画をたてさせます。私は、図書館に日本法についてどんな資料があるかをしらべ、さらにどんな図書が必要かを検討します。そうして書店に連絡します。このようにして、あたらしい課目をもうけ、あたらしい分野を開拓し、全体の課程を拡張することができます。必要な図書の蒐集について図書館が責任をとるからです。これが教授と図書館の協力関係です。このようにしてコレクションが発展します。しかしその教授が二年くらいして他の大学に転任すると、以後私は、このコレクションを継続するか、あるいはこれを停止して他の図書館に売るかを決定しなければなりません。これを処分する径路はいろいろあります。アメリカの図書館、とくにロー・ライブラリーでは、カリキュラムに関係のあるコレクションを発展させると

いうつよい態度がみられます。そこで、カリキュラムが変わると、図書館の外国法コレクションをどうするかを、あなた方におききたい。

私は、日本の一四の大学がすべて大量のアメリカ法コレクションをもつことをすすめたくない。これは非常な浪費です。

岸本 あなたは二つの異なった貴重な助言をなさいました。一つは図書館を利用する者を一カ所にこさせるインテグレーションです。これには国内法をふくみます。あなたは外国法についても一つ助言をなさいました。われわれは混乱してはいけません。(笑声)

ボーガソン そのとおりです。一つは、コレクションを統合することです。一つは、全世界的であると地域的であるを問わず、コレクションをカリキュラムや修習の目的にそって発展させる。これは二つの異なったことです。

岸本 二つの別のことを忠告されているのではないか。

大野

その点は、日本の法律学が非常におくれています。明治初年に帝国大学がつくられて法律学の先輩が読みだした本が、だいたい一九世紀のものばかり、一七世紀、一八世紀の本はこの大学にもほとんどないのです。そこに日本の法律学の後進性がある。ほん訳法学というものです。もう一つお聞きしたいことは、どうやって古い本を蒐集するかということです。

ボーガソン

私の経験と知識では、

他からアドヴァイスをうけるのがよい。外部から古書の売却案内がくれば、私は、学内に法制史学者がいれば、その人に相談して意見をきく。そして、もとめるべきだという結論に達すると、私はどこから資金を調達するかを考えなければならぬ。そして、学長のところに行き、このようにして資金を調達し、このような本を買うということについて許可をうける。ちょうど、非常にたかい給料であらたに人を雇うときとおなじです。学長はこれを了承する。

大野

ほかの金持が買おうとすると、ボーガソンさんが行って、これを売ってくれというと、優先的にとれるのですか。

ボーガソン

競売場にいけば、私はそこで買う。

大野 ほかの人がたかく落とせばどうなるか。

ボーガソン

第一に、法律圖書の競売はすくない。ほとんどロンドンで行なわれる。私は電報で入札するのですが、最高購入価額をきめておかなければならぬ。

レアリー

特別の個人の蒐集圖書の場合には、競売でなくても、買手の競争があります。スタンフォード大学の先生が死んで、その未亡人が三、三〇〇冊の国際法のコレクションを売ることになり、私とスタンフォード大学が競争して買おうとした。私は六ヵ月間なんとかして買おうと努力しましたが、とうとう国連が買ってしまった。

大野

私のところで、ニュールンベ

ルグA級戦犯の英語の裁判記録を買おうとしたとき、だれか民間の人がたかく買うといって、本屋がその人に売ったことがあります。このような値段の競争がたびたびあります。

岸本

すべてコマーションライズされております。(笑声)

ボーガソン

アメリカでは、ニュールンベルグの記録は手ばなす者があるようです。

大野

そういうものを見つけて買うといい。(笑声)

岸本

おたがいに貸しっこすればよい。(笑声)

斎藤

ハーヴァード大学図書館でなにか問題がありますか。

ボーガソン

問題ですか。私たちは十分な金がない。人がたりない。ノー・マネー、ノー・ビープルです。(笑声)

大野

ではこれくらいにいたします。どうもありがとうございました。

附記

この記録は、当日の録音テープを、土井輝生助教授が整理されたものであります。